九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

去来の一句の解釈

橋本，元二郎
大阪市立大学講師

https://doi.org/10.15017/12398

出版情報：語文研究. 1, pp.89-93, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

去來の一句の解釈

橋本元二郎

去来の伝記や、その俳諧史上の位置などについては、今は省略することとして、本稿においては、たゞ彼の一句の解釈をめぐつて、いささか所見を述べることとする。

扨て、解釈の対象となるその一句は

秋風やしら木の弓に弦張らん

という句である。この句は、「芭蕉七部集」の「阿羅野集」巻之四の「初秋」（巻之四は、初秋、仲秋、暮秋に分けられている。）の部に入れられていて、去来の名句の一つとして知られている。多くの文学史や俳書においても去来に関しては、大概この句が、彼の代表句の一つとしてあげられているようである。顕原退蔵氏も「蕉門の人々」において、この句と、「湖の水まさりけり五月雨」との二句を「共によく去来の特色を発揮した作といふべきであらう」と述べられている。

俳書のうちには、この「秋風」の句を、去来の最上の句だとする人もある。例えば、俳句雑誌の「林表」（註、大正十四年七月「倦鳥」より分離したもの）の第二号に、戸田蔬竹という人が、

「天春静堂氏の去来研究（註「倦鳥」に連載されたもの）は有益な読物でありました。倦鳥六月号で完結したが、其巻末に去来の代表句として十数句を挙示せられてゐる。私は、此中に、私が豫て去来集中の最好句と信ずる

秋風やしら木の弓に弦はらん

が逸せられてゐるのを遺憾に思つた。彼の千載和歌集に西行が鳴立沢の詠の逸せられしを聞き、其集を床しからずとせし如く、いささか物足らなく感じました云々」

として、この句を最上のものとしている。とにかく、この句が去来の面目を最もよくあらわしているものの一つであるということには異存はないであろう。

しからば、この句は、どういうように評釈されて来ただろうか。

松瀬青々氏は「倦鳥」の大正十四年六月号の「去来句小解（十一）」で、

「秋風の淋しき感じを受けて、その淋しさに堪えず、緊張した力に触れたい欲求から、白木の弓に弦を張つて見ようといふのである。白木の弓に弦をはるといふことは実に強い緊張した感じである。」

と解く。いかにも俳人らしい評釈であるが、この評訳には、二つの疑問が生ずる。

その一つは、氏が「秋風の淋しき云々」と、言つていられることについてである。淋しさの感に堪えず緊張した力に触れたいという欲求

は一般の人々にもあり勝ちのことであり、まして敏感な詩人は一層その感を深うするものである。この限りでは氏の言わるゝ通りであるが、問題は「秋風」の意味である。秋風が淋しく感ぜられるのは、秋も半ばを過ぎて、むしろ暮秋の頃ではなかろうか。しかるにこの句は前にも述べたように、「初秋」の部に入れられているのである。これは如何なるわけだろうか。青々氏においては、秋風は淋しきものであるとの伝統的先入観が、暗々裡に、この解釈に伏いているのではなかろうか。

疑問の第二は「しら木の弓に弦をはる云々」という点である。これについては疑問の中心は「しら木の弓」であるが、「白木の弓」は、いうまでもなく「塗木の弓」即ち塗弓に対する語である。塗弓は弓体を漆で塗つた弓で、これに対して白木の弓は漆の塗っていない、また藤をも巻かない生地のまゝの弓をいうのである。去来の句には「しら木の弓に弦張らん」とあるが、青々氏の解釈においては、たゞ、弓に弦を張るという緊張感にのみ重点がおかれているようであつて、何故それが白木の弓でなければならないのか、という点については、なんら解答が與えられていないように思われるのである。

私は、以上の二つの疑問を青々氏の解釈から受けたのであるが、この二点を心に持つて、さらに他の評釈を探ってみよう。

この句を去来の最好句とした戸田豉竹氏は、前に掲げた文に次いで、

「此の句は、実に去来の人格をよく現はしてゐると思ふ。白木の弓に弦を張る其の緊張した感じは去来自身の態度の緊張であり、秋風の勁き趣と一つになつてゐると思ふ。（中略）「曠野」には此他

涼しさよ白雨ながら入日かげ

湖の水まさりけり五月雨

（註十四句である）

など合計十句載つてゐる。去来としては比較的初期の作であらう。それから、此句は秋風と言ふ季感を確かりと摑んでゐる点も注意して見なければならない。季感と言ふものを沿革的に調べて行くと、「曠野」までより遡れない。「春の日」に数句あるばかりで、それ以前になると、季語が単に句の一部をなしてゐるに止り季感として全句面に被覆する如き事はないのである。如斯季語が季感として句にあらはれた歴史的意義ある代表的句であることにも此句は注意さるべきである。」

とあつて、青々氏における秋風の寂寥感は、豉竹氏にあつては秋風の勁き趣となっている。ここに、秋風に対する感じの相違が出て来ているが、この場合、何れの解釈が適切であろうか。前に、この句が「初秋」の部に入れられていることから、一寸この点に触れかけたが、これは暫く措いて、彼の性格や句風の上からこれを考えてみよう。「落柿舎去来先生事実」や「落柿先生行状」によると、彼の父兄は儒医であるが、彼は叔父久米諸左衛門の感化を受けて、幼時から武芸を嗜んで弓馬の道に通じていた。尤も、武芸を勵んだのは少壮の時だけで、三十才に達しない時に、既に武人としての生活を捨てゝ、芭蕉の門に遊び、風雅の道に入つているのであるが、少壮期に於ける武歴は彼の性格の一端に喰い入つていて、彼の代表作とされるもののうちには武士らしい気慨のあるものが多い。

元日や家に護りの太刀佩かん

鎧着て疲れたためさん土用干

等は此の例である。これ等の句をなした彼の句風から見ても、秋風についての感じは皷竹氏の方に歩がありそうである。顔原退蔵氏も「蕉門の人々」では「秋風の句には去来の武士的な高潔さが感ぜられ」と端的に述べられているが、言外には秋風の寂寥感よりも勁き趣を感じていられるようである。しかし、皷竹氏も、私の疑問の第二の点については青々氏と同様であつて、なんらの示唆もないのである。たゞ、氏が、この句について、「季語が季感として句にあらはれた歴史的意義ある代表的句である」といわれているのは、問題とは直接関係はないが、注目すべき言葉であろう。

秋風と白木弓との関係について、この句において、もし「白木の弓」が「塗り木」の弓であつたとしたらどうであろう。この句のよさはもとより破壊されてしまうに違いない。この点については、早く、内藤鳴雪氏が「七部集俳句評釈」（俳諧入門叢書第九編、明治三十八年）において、「（註この句の上五と以下とは）理想的の配合で、且つ古来支那には秋の色を白と定めてゐる」と述べていて、四季感と色彩感との関係からその緊密性を説いていられるが、この「白木の弓」は単に秋は白で象徴されるという聯想上の修飾のみで律し去り得られるのであろうか。或いは、また、更に秋風と白木弓の性能との間に何か密接不可分の関係があつて、そこにこの句の季感が遺憾なく表現されているのではなかろうか。この疑問を解いて呉れたのはやはり、子規であつた。子規は「俳諧大要」（明治二十八年）でこの句を解して、

「夏時白木の弓に弦を張れば膠（にかは）が剝げるとて秋冷の候を待ちてするなり、故に秋風や と置けり」

とある。さすがに、子規は卓見である。しかし、それに次いで、

「されどもそればかりにては理窟の句にて、些（さ）の趣味無し。蓋し弓は昔時に在ては神聖なる武器にして、戦場に用いらるゝは言ふ迄も無く葬目などとて妖魔を攘（はら）ふの儀式もある位なれば、金気の粛殺たるに取り含せて自ら無限の趣味を生ずるを見る。況んや其弓は白木の弓なるをや。白色には神聖の感あり、粛殺の感あり。故に秋の色は白とす。此の句無造作に詠み出でて男らしき処を失はず。有り難き佳句なり。」

とあり、前に述べた鳴雪、青々、皷竹氏の解釈は、子規の説の踏襲であつたのである。秋風と白木弓の性能との関係は「そればかりにては理窟の句」として子規に軽視せられたがために、それ等の人々の意に上らなかつたのであろう。

しかるに、この点を再び重視して解釈にとり上げているのが、幸田露伴の「評釈曠野」である。同書には

「塗り木のあしき弓は、五月雨のころ萎えて真夏には力弱くなり、風強く立たば弓も好くなるものなり。弓の仂きは白木のかた勝れり。まして、秋風の吹くをや。」

と、あつて、白木弓を塗弓と対比することによつて解かれている。萩原羅月氏も、最近、「俳諧七部集」（昭和二十五年一月刊）で

「秋は空気の乾燥する時季で、弓の張りが強く、手ごたへがあるから、弦をかけて引いて見ようかといふ意である。作者は弓馬の道に達した人で、今は京の落柿舎に隠棲し、弓矢を捨てゝゐるが、秋風が冷たく吹くにつれ、昔が恋しくなり、弓を引いて見る気になつたのであらう。白木の弓は漆をかけない弓のことで、普通の塗り弓より強く引けるものである。秋風と白木の弓との取り合はせがよく利いてゐる」

とある。露伴や羅月氏において、子規が嘗て、理窟なり、として斥け

た白木弓の性能が再びとり上げられて来ているのは、注意すべきである。

白木弓の性能に関連して、次に問題となるのは、下五の「弦張らん」の意味である。

露伴や蘿月氏の解釈では、単に弓に弦を張るばかりでなく、更に弓を引くという意が含まれているようである。しかるに子規においては「夏時、白木の弓に弦を張れば膠が剝げるとて云々」とあつて、「弦張らん」は、文字通り、弦を張るその事にありとする。この両者の解釈の相違は、この句の解釈にとつては重大であつて、前に、この句が「初秋」の部に入れられているのを指摘したが、私は子規の解釈に従うことによつて、このことが判つきりするのではないかと思う。しかしながら子規の言う「膠が剝げる」とは如何なる意味であろうか。これには、まず、弓の構造の歴史について一考する必要がある。

一体、古代の弓には「記紀」によると、梓弓、槻弓、柘弓、檀弓の名があり、この名称は、これ等の木が弓の材料として用いられたことをあらわしている。また、やはり「記紀」には「天麻迦古弓、天鹿児弓」なるものがあり、宣長は「古事記伝」においては、これを鹿を射る大なる弓としている。このように弓材や用途の上からいろいろの名称があるのであるが、その構造の上から見れば、何れも丸木弓である。丸木弓とは、後世の弓のように木と竹とを貼り合せたいわゆる合成弓ではなく、単に木を削つただけの単木弓を言うのである。合成弓の発生については、後藤守一氏は、正倉院の御物の二十七張の弓を調査せられて、それが悉く丸木製であり、（梓弓三張、槻弓二十四張）後世に見る様式のものは一張もないと報告せられている（「原始時代の武器と武装」）から、奈良朝時代には、その遺品から見て、未だ合成弓は出現していないとしなければならぬ。これの発生が何時頃であつたかは、今日正確に判明しないが、源頼政の歌に

思はずや手ならす弓に伏す竹の一夜も君にはなるべしやは（源三位頼政集）

というのがある、この歌によると、頼政時代には既に伏竹の弓があつたらしい。この伏竹の弓は、木の一面に竹を合せた合成弓なのである。伏竹の弓が案出せられたのは、当時の最大の武器である弓の力を増し、その威力を発揮さすためであつたろうが、この弓は木と竹との接合点がにべ（膠或いは鰾）で貼りつけてあるので、雨露や暑気にあえば、にべがゆるんだり、沸いたりして離れ易いのである。それで、頼政の歌においては、「伏竹」が離るの縁語として使用されているのである。未木和歌抄にも知家卿の歌として、「あひおもふ」の題のもとに

梓弓末までとほすふせたけのはなれがたくも契る中かな

とあつて、こゝでも縁語になつているのは、頼政の場合と同様である。当時、いかに木と竹との間が離れ易かつたかが想像せられるのである。同じく、未木和歌抄の琳賢法師の

いかにせんまゝきの弓のともすれば引はなちつゝあはぬ心を

の「まゝきの弓」の実態については、屋代弘賢の「古今要覧稿」などにはいろいろと論ぜられているが、伊勢貞丈の如く、これを伏竹の一種（貞丈雑記）と見れば、更にこのことが強調せられるわけである。それで、伏竹の弓は主に的弓として用いられ、軍弓としては丸木弓が後世までも使用せられていたことは「義経記」にもあるとおりであ

る。弓に漆を塗ったり、或いは藤を重く巻くことは弓を強靱にするために丸木弓にも用いられたであろうが、合成弓ではにべ離れを防ぐために、特にその必要があったのであろう。塗弓や重藤はかくして生れたのであろう。伏竹弓はその後、木の両面に竹を貼った三枚打の弓となり、更に中央に弓胎を持つ形式に発展して、構造としては一応ず完成せられて、今日へと伝っているのである。この完成期は大体、室町後期から近世初期と推定せられている。（斎藤直芳氏「日本弓道史」）

以上、弓の構造の歴史について述べたが、要するに、合成弓は木と竹との貼り合せのところが離れ易いものである。そして、同じ合成弓のうちでも、塗弓や重藤の弓より白木弓の方がその可能性が大である。

扨て、去来の句の中の「白木の弓」はかゝる構造を持った白木の弓なのである。では、このように破損し易い白木の弓が、何故好まれたかというと、的弓では、軍射とちがって、単に射当てるということよりも、射の気分とか風格とかを味うものである。こゝに多分に芸道としての性格が生じて来ている。尤も、この気分とか風格とかは、多く射術の巧拙から生ずるもので、単に弓具の如何ばかりによるものではないが、塗弓は白木の弓に比べると鈍重の感がするものである。弓の冴えとか弦音を味うには白木の方に限るのである。露伴が「弓の仂きは白木のかた勝れり」というのは、このことであろう。しかるに、白木は前にも述べたように、雨露に弱く、殊に暑気に破損し易いものであるから、心ある射手は夏期には弓を張らないのである。子規が「弦を張れば膠が剝げるとて秋冷の候を待ちてするなり」というのは右の理由によるのである。かく見ると、「弦張らん」は、やはり子規の説くように、文字通りに解しなくてはならぬ。

右のような解釈のもとに、この句の創作意図をうかがって見るに、夏期長らく弦を休めていた白木の弓に、秋風が立ち初めると共に、最初の弦をかけて、その張り顔や調子を、あたかも長らく別れていた人に会ったようなつかしさをもって、と見こう見する、という瞬時の情感を形象化したのではなかろうか。この句が、とくに「初秋」の部に入れられている意義も了解せられるのではないかと思う。

執筆者紹介

笹淵友一	東京女子大学教授
平井秀文	福岡学芸大学教授
永井寛	福岡県立八女高等学校教諭
目加田さくを	福岡女子大学助教授
横山正	大阪学芸大学助教授
秋山正次	熊本師範学校教授
橋本元二郎	大阪市立大学講師
石井和男	九州大学文学部研究生
重松泰雄	九州大学大学院特別研究生
立川昭二郎	九州大学大学院特別研究生